
ゴミ小説

ちょろやさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴミ小説

【コード】

N2560Q

【作者名】

ちよろやさん

【あらすじ】

ファンタジーっぽいのです。

プロローグと一話目（前書き）

中二の時に書いたのを引っ張り出してみました。

プロローグと一話目

とあるビルの最上階。

そこには二人の男女の人影があつた。

一人の男は中央にある社長机の端っこに腰を掛けて座っていた。

ひざの上にはノートパソコンがありそれを操作していた。

もう一人の女のほうはその前に立って男の顔をじっと見つめていた。

二人の服装はというと男はGパンにTシャツ、女の方はというと何故かメイド服だった。

二人はしばらくそうしていたが、女のほうから口を開いた。

「あの」

「ん？なんだ？ガーたん」

「そのあだ名止めてください。気持ち悪いです」

「うわ、ひどい事言うなあ。まあいいや。それで？」

「この格好恥ずかしいです。というかそもそもこんな服どこで買ったのですか」

「向かいのコスプレショップで安く売っていたから買って来た。ガ―子に似合うかなと思って」

「そのあだ名も嫌です。こんなの似合いませんよ」

「ちよつとそこで片足でターンしてみてください」

「こうですか？」

くるっときれいに回った。

「・・・似合わない」

「・・・着せたくせに」

「いやだって本当に似合わないし」

「・・・怒りますよ？」

「回り方が完璧すぎるんだよ。もうちよつときちなく回るとかさ」

「こうですか？」

「あ。《救済》が学校に着いたみたいだ」

「・・・見てくれないのですか」

「え？なにが？」

「・・・もういいです」

半ば諦めるように言って女は男の横に歩いていき、パソコンを後ろから覗き込む形になった。

「それで、この少年が《救済》なんですか」

パソコンにはどこかに向かって急いで走っている少年が映っていた。

「普通の少年に見えますが・・・」

「普通でいいんだよ。これと言った特徴が無いほうが《救済》らしいんだよ」

「《救済》矢吹翔也。>神の敵くが近づいている。接触する可能性あり。要注意。」

4月。春。

矢吹翔也。今年から高校1年である。

しかし緊張している高校生とは違い、北略高校の校門前で浮かない顔をしていた。

実はこの高校は翔也の行きたい学校ではなかった。

他の高校に行きたく、そこは偏差値はそこその割に有名大学の進学率が高く、翔也の成績ならば十分受かるはずで担任からも受かるといわれ見事に、見事に・・・落ちた。

受かると言われたときに安心してしまいほとんど勉強をやらずに遊び呆け、気づいた時にはもう遅く、勉強したが間に合わず、結果は惨敗。

他の高校も受けたが最初のショックから立ち直れずことごとく落ち、最後の北略高校に辛うじて受かったのだ。

しかもまた癖が出てしまい、1日目早々遅れてしまったのだ。周りにはもちろん人影はなかった。

癖が出るのが分かっていたのなら早く出ればよかった。

翔也はそう思いながら校門を潜り抜けた。かなり恥ずかしい思いをして入学式に途中から入って行き閉式の言葉を聞くまでが地獄だった。

唯一救いだっただのは席順が一番後ろの窓側であんまり目立たなかったことぐらいだった。

しかも隣が中学生時代一緒に比較的仲のよかった武藤真名（男だ）だったのだ。

席に着いたらすぐに武藤が話しかけてきた。

「よう、入学式早々遅刻したな」

「その話題には触れないでくれ……」

「また癖が出たのか？」

「ああ、うん、まあ」

曖昧に返事すると、

「遠慮なんてすることないだろ。小学校から一緒だったんだから別に今更癖が出たって驚きやしないさ。でも余り他のやつには話さないほうがいいとは思っぜ。よくて妄想、悪けりや病気だと思われるからな」

「聞かれるまでは話す気はないよ」

「それはそうと俺たちかなり運がいいぞ」

「へえ。何でだ？」

「他のクラスと比べて俺らのクラスが1番女子が多くてしかもかわいい子ばっかなんだ」

翔也半ば呆れながら、

「お前いつ調べたんだよ……」

「はっはっは、それは俺が朝6時半に登校した賜物だよ」

「馬鹿かお前……」

「でも成果はあったぜ。女子って基本的に朝早く来るだろ？」

「まあ、そうだろうな」

「んで男子は朝早く来る奴はあんまりいないんだよ。まあ来るとし

ても、無口な奴が多いんだな。だから俺はいろいろな女子とたくさ
ん話して品定めができたのさ」

翔也はハアと溜め息を付きながら、

「まあ、いいけどさ。でも夢中になりすぎて落第とかするなよ」

「何とかするさ」

「やー翔也君ひっさしぶりー」

肩を叩かれたので振り向くと翔也の頭の中には電撃が走った。

そこには、おそらく全国の日本人男子の半分が振り向くであろう美
少女が佇んでいた。

しばらく見とれていると、

「ん？私の顔忘れちゃったのかなっ？」と、屈みこんで翔也に顔を
近づけてきた。

少し仰け反りながら誰だったのか思い出そうとすると、「ほら小学
校一緒だったろ」と、後ろの武藤がヒントを出してくれた。

（小学校の頃一緒だった？でも俺の名前を覚えているほど仲が良か
った女子なんていたっけ？あ、でもこの癖のあるしゃべり方は・・・

）

「ま、まさか海野うみの 光ひかるか？」

「ピンポーン！正解っ！」

いきなり目の前で大声を出された翔也はキーンとなった耳を押さえ
ながら「い、いきなり大声出すなよ・・・」

「いやあ、ごめんごめんっ」

「まあ、いいや。それにしてもあってない間にずいぶんと変わった
なあ。性格は変わってないけど、すごい女の子っぽくなったな」

光は小学校の時まで翔也の家の近くに住んでいて、よく二人で遊ん
だことがある。

普通は4、5年生ぐらいになると女の子は外で遊ばなくなるのだが、光は正反対で、6年生になっても翔也や他の男の子とずっと外で遊んでいた。

後、仲が良かったのは翔也の親が泊り込みで仕事をすることが多く、その度に翔也は妹の翔子を連れて光の家に泊まりに行かなければいけなかった。

ちなみに翔子は今年小学5年生になった。

「俺もびっくりしたよ。俺の次に教室に入って来たのが光でさ、俺は全然気づかなくて話しかけたんだけど、話している間ずっとニヤニヤしていてさ、んで名前聞いても答えなくて、逆に「さて誰でしょう?」って聞いてきて、俺が翔也に出したヒントを出してくれるまで全然分からなかったぜ」

そのうちクラスの新任が入ってきてそこで俺たちの話は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2560q/>

ゴミ小説

2011年1月26日07時27分発行